鶴見文化財学会報
Tsurumi Cultural Properties A.C

vol.10
2009年３月16日発行
鶴見大学文化財学会

はじめまして、これからもよろしく

宗　臺　秀　明

この原稿を書いている今は、晩秋の11月末です。速いもので新学期が始まってから、すでに８ヶ月を過ぎようとしている。１年生も大学生活に慣れ始めた一方で、４年生は卒論の追い込み、大学院生は修論の詰めで苦しい時を過ごしていることだろう。かく言う私も授業の準備や講義のほかに、慣れぬ学務に追われている。文化財学科が鶴見大学に設置された1998年から非常勤で学科にお世話になってきた私が、今年から常勤として働き始めました。学務などは年度単位で動いている仕事のため、１年を経験しないと全体の把握をしにくいものと思われます。そうした慣れない学科・学部経営と研究のほか、教員の仕事の中でもやりがいがあり、そして楽しいのはやはり授業です。

これまでは非常勤で夏休み後に始まる実習と２年生以降が受講する講義をしてきたが、今年からは入学式で１年生を迎えることから一年が始まった。そして、文化財学科では、１年生の入学と同時に実習が始まる。

その実習ⅠAは、毎週土曜日の午後に近隣の博物館などを訪ねて、身近な文化財に触れつつ、その展示方法などを学ぶ授業です。実習には河野先生の他に１年生前期の授業に初めて加わる私の二人が担当となったが、訪ねる博物館によっては文化財学科の他の先生がたも時に加わって、それぞれの専門や興味に沿った説明が随時行われながら博物館の見学が進んでいく。私も施設を参観する学生たちに意を注いで欲しい場所で彼らを意識的に待ち受けて説明をするなどをしたが、他の先生がたはすでに１年生の名前を呼びながら話を進めていた。新学期が始まって間もないのだが、すでに名前を覚えることに私は驚いた。しかし、授業が進むのと併行して、来年度の新入生を迎える入学試験の手続きに携わるに従って、先生がたが１年生の多くの名前を覚えていた理由が少しずつ理解できるようになった。それは、入学以前から多くの学生たちとすでに長い時間を過ごしていたからだった。

原稿執筆時点ではAO入試と推薦入試を終えただけであるが、入学を希望した高校生とは何度も面談し、入試に向けた相談と指導を膝詰めで行いました。なかには入試前に６回も面談に来る者もいた。新入生を迎える準備を早くから始めている鶴見大学では、新入生の名前や顔、そしてその性格の一部までをも入学直後の実習で学生と対面すると同時に思い出せるのである。ただし、新しい一年を迎えるに当たって、忘れてならないこともあるだろう。そのことをやはり実習ⅠA恒例の一泊巡検旅行でのある出来事が教えてくれた。

一拍巡検旅行は、まだ入学間もない４月末に小田原、熱海の東海岸から山越えをして韮山、そして箱根へと伊豆半島を巡り、鎌倉時代から戦国時代に関わりのある場所を訪ねる巡検でした。巡検旅行初日の朝、三門前で１年生の集合を待っていたその時、「先生は今年から鶴見の先生になったのですよね？」との突然の声に驚きながらも、「そうだよ」と答えたところ「だったら私と先生は同じ１年生ですね。一緒にがんばりましょう！」の声が帰ってきた。

「えっ！」と絶句した。しかし、よくよく考えてみれば、その１年生が発した言葉は決して間違いではなく、しかも至極真っ当な内容です。今年から常勤教員になったことは間違いないだけでなく、心構えとしては、新１年生と同様に教員も春の新学期とともに新しい１年が始まるのであって、去年の続きではないことを気付かせてくれた言葉だった。

文化財学会
春季・秋季大会関連報告

〈春季大会〉
講演「やきものに見る桃山人の精神性
―志野・織部を中心に―」

報告　2年　萩原　珠咲
1年　守屋　琴美

平成20年度文化財学会春季講演会は、6月7日土曜日に『やきものに見る桃山人の精神性－志野・織部を中心に－』と題しまして、学習院大学教授である荒川正明先生をお招きし、ご講演していただきました。その内容をご報告いたします。

はじめに、日本のやきものは桃山時代を境に、壺・甕・すり鉢などを主にした日常生活を支える質素な「実用のうつわ」から、観て楽しむ調度品としても通じる「鑑賞のうつわ」へと変化したことをご指摘されました。

中世までは、中国のやきものが調度品として扱われており、中国の青磁・白磁の大皿や茶碗・酒器などが好んで使われ、宴などの遊楽の場を飾り立てていた様子を写真や絵を提示しながらご説明くださいました。

しかし、桃山時代以降では志野・織部が中心となり、やきものに形や意匠のなかに時間と空間の流れ・変化を表現するために、古くからあった「風流」をモチーフにして取り入れ、独特の装飾を生み出していきました。その装飾性は、日本古代の風流を元に単純な文様や歪みなど、具象化されないもので、それまでのやきものと違って、大胆で破天荒な造形に変化してゆきました。当時の人々は、そこに美を見出したのです。

このような日本のやきものの革新のきっかけとなったのは、16世紀後半の鉱山開発と銀の輸出による

経済繁栄でした。物質的に豊かになり、日本のやきものは、桃山の町衆たちによって産業化されていきました。

形状や文様のモチーフには、次のものがあります。やきものを三角形に歪ませることで、神が降り立つ場所とされる白砂青松を元につくられた州浜台などを表した［造り物］。柳など樹木の枝や藤の花・葡萄の実など房状のものが垂れ下がったり、葦や萩の葉などが風でたなびき揺れる様子が描かれました。それを植物が枝垂れ揺らぐなかに、神が来臨することを予祝することを表現している［枝垂れ・揺らぎ］といいます。水辺に群れる小鳥たちを示し、見込み部分に配されることが多く、水辺風景や神の影向を表した［千鳥］、同じく神が降り立つ処とされる［傘］など、これらの形状・文様には、聖性の意味があります。

また、現世から浄土など異世界の境とされ、所有者が居らず支配されない場所を表し、主に宇治橋や難波の住吉大社などを描いたとされる［橋］や、同じく内と外の境や内側を開拓者の土地を表す［垣根］。円形であることが仏教の教えである法輪を意味し、牛車の車輪や水車から由来する［車輪］、篭の目が六芒星に見え、ドーマン・セーマンなどの陰陽道的な形も鬼が恐れるとされる［籠・篭目］。植物や果実・鳴子や瓢箪を吊るし、元は勧請吊と呼ばれる、悪霊や災厄が入らないように、神仏を勧請する場所や村の出入り口に吊るす注連縄である［吊し］などの様々な文様があります。これらの文様には、結界や邪気を祓うという意味が込められているとされたため、当時の奇抜な風姿で巷を横行する「かぶき者」の衣装の柄としても、流行しました。

以上のお話ののち、当時の人々の考え方を理解するためには、同時代の様々な分野の分析をすることが大切であると、最後に指摘され講演会は終了いたしました。

〈秋季シンポジウム〉
「墓葬とは何か」

報告　2年　萩原　珠咲
1年　守屋　琴美

平成20年度秋季シンポジウムは「墓葬とは何か」と題され、11月8日土曜日に開催されました。

はじめに、問題提起とし、本学教授である河野眞知郎先生から人である以上いつか通る死、それに関わる葬送は人間の精神文化として他の生物にはないのだから、正面から考えていく方向で、シンポジウムが開始されました。報告は4名の方々でなされました。

まず、本学准教授の下室覚道先生に「仏式葬儀について－道元禅師の思想を含めて－」という論題で、発表していただきました。日本に火葬の形態を導入したのは仏教とのことです。開祖である釈迦が荼毘に付されたことに由来します。三味聖と呼ばれる私度僧が火葬にかかわったことが、僧と葬儀が深くかかわるきっかけになりました。人が死んでから転生する間のことを中有といい、そのとき僧侶の読経と廻向によって、よりよい来世へと導くことが可能である、としているのが可転論です。先生は『仏道』『発菩提心』などの記述より、曹洞宗開祖の道元禅師が可転論を認めていたとし、葬儀を行うことに対して肯定的であったと述べられました。

次に、本学准教授の宗臺秀明先生が「やぐらと供養の諸形態」という論題で発表されました。やぐらとは、鎌倉時代より近世前頃まで作成された、岩肌をくりぬいた宗教的空間とのことでした。必ずしも一人用ではないようで、山王堂東谷やぐら群のように敷石の下に火葬骨があるものや、弁ヶ谷東やぐら群にみられるような土葬された遺骨が出土する例も発見されており、墓の役割も大きかったと指摘されました。中には仏像が安置されたもの、西瓜ヶ谷やぐらのような五輪塔が彫りだされたものもあります。先生は生前修行した法華三味堂が墓に起用され、さらに結縁を求める追葬が行われるという墳墓堂起源論に着目されました。修行と供養が行われるアジャンター石窟の例を挙げられ、また修行、祈祷の場でもあったと墓との結びつき、そして追葬の機能があるやぐらに結縁という性格を求められました。

続いて、本学博士前期課程2年の村松彩美氏から「中世鎌倉　浜の墓葬」と題して発表がありました。13、14世紀代頃の人骨が3000体以上検出された由比ヶ浜南遺跡の分析結果を基に、海浜部の葬地としての様相、葬送形態、また、それらの資料から当時の人々の生活が読み取れることや、その被葬者についての考察をされました。浜でこれだけの人骨が報告されているにもかかわらず、市街地には遺骨の発見例がないとのことから、都市部より日常的に死者は浜へ送られていたことが伺えます。葬法別分布図を見ると、埋葬姿勢、頭位、年齢、性別が特にまとまりが見られないこと、土壙に埋められても地上に供養の痕跡が見られないこと、副葬品の検出例が少ないことなどから供養の意識が極めて薄いとの指摘がなされました。また、集積埋葬には遊離人骨が見られることから、既に腐乱・白骨化した遺骸が埋葬されたと考えられます。遺骸には受傷痕があるものもありますが、そうでないものも多く、浜の被葬者は合戦の死者だけでなく武士階級より下層の都市民ではないかと論じられました。

最後に、河野先生より「近世墓石塔の編年」という題で報告がありました。1975年の船橋市中野木町民俗調査結果を元に、墓石塔の変遷を伺うことができます。中野木村は江戸時代にできた小さな農村で、30軒の家々が200年間屋号を受け継ぎ分家せずにきた共同体の意識の強い村です。形式別に墓塔型式の統計をとることで、板碑型、舟型（背光型）、丸頭型（櫛型）、角柱尖頭型、角柱台頭型へという編年が確認できます。現在でもその変化は漸移的、切り替わるのではなく徐々に変化していくのがわかる、との分析でした。石塔における被葬者数の統計により個人墓から家族墓、家系墓へという変化も見受けられます。地域による石塔統制の相違点、墓石の立てられない死者などの問題も残っており、追求の必要がある論題であると指摘されました。

討論は本学教授である伊藤正義先生を司会とし、聴講者の質問に答えると共に、補足説明も踏まえたディスカッションが行われました。

各学年の実習の感想

実習Ⅳ（国内）旅行記

岩橋　春樹

今年の国内研修は西国巡歴。瀬戸内は尾道の名刹浄土寺を振り出しに、呉の大和ミュージアム、厳島神社、岩国錦帯橋。日本海側へ抜けて、雪舟所縁の益田、石見銀山、出雲大社、そして松江城下、八雲立つ風土記の丘など。締めくくりに水木しげるロード、水木記念館で売り出し中の境港を訪ねた。

やや雑食風の印象もあるが、古代から現代にわたる各種の文化遺産を個々単発に見学するのではなく、歴史は重層しているという観点から、総合的に眺めてもらうのが狙いであった。単なる酔狂で大和や水木しげるを含めたわけではありません。

以下、心にのこった事どもを列挙。

○大和ミュージアム

呉市海事歴史科学館が正式名称。10分の１縮尺、全長26.3mという戦艦大和の模型が目玉であるが、大形のスケールモデルとしては細部の作り込みが物足りない。その他、実物展示資料のうち、零戦搭載13mm機銃は間違いではないかと申し上げたのは当方の誤認につき訂正しておきます。零戦52型乙（昭和19年採用）から３式13mm機銃も装備。

○三好屋

商人宿の風情をのこした益田の旅館。鰈の煮付けは何とも田舎風の濃い味付けで、酒の追加は一升瓶を渡してくれた心意気が好ましい。更に甘えて梅干しを所望したところ、取って置きの自家製逸品であった。一部学生諸君との話も大いに弾んだ。実習旅行では見学などより、夜の談話が大切なのだが、今回は概して部屋へ引きこもりタイプが多かったようである。

○見返りの鹿

八雲立つ風土記の丘資料館に展示中。松江市平所遺跡出土、動物埴輪の名品で重文指定。今回の巡見で出会った造形美術としては、松江城天守閣の構えと双璧をなすといって良い。鹿が振り返った一瞬の機微を見事に表現している。

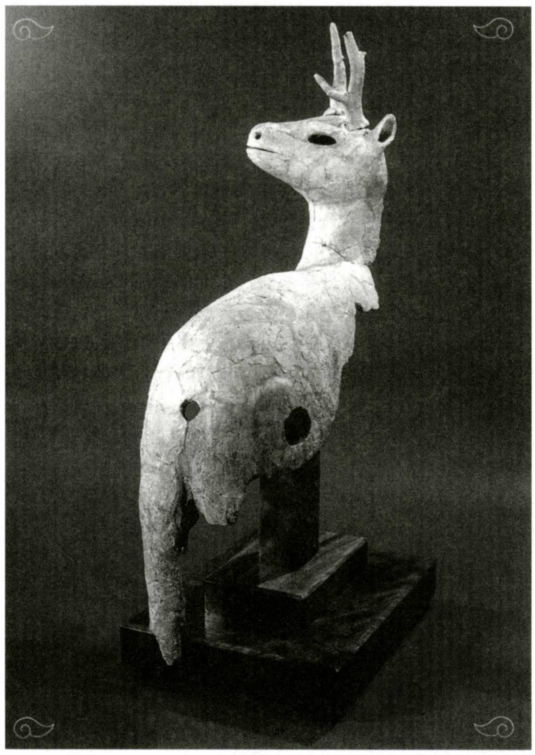
○八雲塗

明治時代になって松江の特産として創案された漆器という。彩漆による華やいだ文様を器表に沈み込ませている。前から気になっていたので、山根漆器店にて桜花の小椀（ぐい呑？）を一つ購入。鎌倉から来たと言ったところ、八千五百円を二千円引き。店主の話では後継者難で、先細りとの由。

○ボランティアガイド

浄土寺のオジサンは尾道弁丸出しの名調子。厳島のオバサンはロボットの如き無表情。大和ミュージアムは年配の解説員が軍港呉への想いを熱く語る。石見銀山では会長さん自身が雨の中を熱心に案内して下さる。松江堀河めぐりの親切な老船頭。それぞれ郷土愛のかたちであろう。

了。



平成20年度　実習Ⅳ（海外）の報告

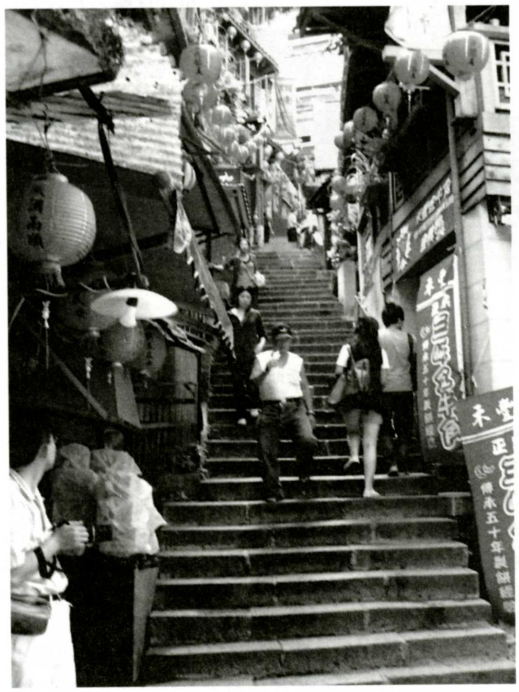
加藤　寛

今年度、4年生の海外実習はトルコを目指して計画を立てていた。はじめの説明会で学生に対して、今回の研修先はトルコでもっとも安全と考えられる地中海に面した西側の遺跡を中心にした旅行であることを告げた。説明会を行ったあとイスタンブール郊外で民族紛争によるテロが発生したため、その状況を外務省国際安全室に照会したところトルコでのテロは外国人を対象にしたものでなく年間35万人の日本人がイスタンブールを訪れている実績からも安全との回答を得た。しかし、その数日後にボスポラス海峡の対岸にあるアジア人街で再びテロが起こってしまった。そのために大学内で協議を行い、その結果、急遽行き先を変更することになった。行き先は“台湾”。近くて多くの日本人観光客が訪れる島。取り急ぎ学生を集めてその後の状況と新たな旅行計画を説明した。九州よりやや小さな台湾は、北から台北、台中、台南、高雄と島の西側に都市が集まり、その都市にある文化財を訪ね最後に台北の故宮博物院で世界最高峰の中国美術を堪能するといった計画が披露された。

成田→台北は飛行機で3時間半。台北桃園空港からバスではじめの訪問地台中を目指して移動した。途中、バスの走る高速道路は片側4車線で最近開発された韓国の仁川空港とソウル市を結ぶ高速道路とほぼ同じ企画で日本よりも道幅が広い。台中では、民族博物館や山岳鉄道の集集線（チーチーシエン）に揺られて台湾の自然を満喫した。その鉄路の始発駅である二水では1950年代そのままの町並みが見られ中国南部の福建省を思わせる佇まいを感じさせた。次に訪れた九族村では台湾のテーマパークとして先住民族の生活や舞踏などを実演している。日本での情報不足からこのような文化財の保存方法を開発していることに興味を抱いた。台南市では1624年からオランダ東インド会社によって築城されたゼーランディア城を訪れた。海に突き出た半島の先にレンガ造りの砦といった建物で、中国産の絹を交易の中心と考えていたオランダ人が築き上げた台湾初の城郭であり、現在、オリジナルのレンガ壁の一部が残されている。

そういえば台湾は食の宝庫でもある。北京、上海、四川など中国各地の料理はもちろんのこと、台湾バナナをはじめとした果物やとくに茄子、トマトなどの野菜が美味しかった。また、日本と同じくコンビニエンスストアーが数多く街中にあり、販売する商品も日本と同じかむしろ日本よりはやく新製品が登場していることに驚かされた。日本は台湾に向いていないが、台湾の視線はつねに日本を向いて情報を発信している。

高雄を訪れたあと日本製の新幹線に乗って約1時間半で台北駅に到着した。台湾最大の都市台北は人通りも車の量も東京や横浜と変わらず、ひとつ違いを揚げればバイクが止まってくれない。バイクに跳ねられると跳ねられた人が悪い、中国やベトナムとよく似た習慣である。翌日、台北郊外の故宮博物院を訪れた。総数60万とも65万件とも伝えられる収蔵品から、メトロポリタン美術館、大英博物館それにルーブル博物館に次ぐ世界第4の博物館とよばれている。博物館は2年前に全面的なリノベーションを終えて新たに開館をした。最新の展示ケースや展示方法、年間200万人を超える来館者への導線など従来の中国式から世界最新の展示施設と変身を遂げた。基本的な展示方法は時代展示であるが、中国歴代皇帝の収集した絵画、彫刻、工芸などの諸作品は見る者を釘づけにするほどの圧倒感があった。最終日には訪れた階段の街九份は、美しい海を望む急峻な山につくられた網目のような階段で商店が繋がっている。アニメ作家の宮崎駿が「千と千尋の神隠し」の中で階段の街を表現したが、彼はこの町までやってきて取材と作画を行っている。紺碧の海と坂の街は参加者の喧騒を取り去り、この実習を締めくくるにふさわしい場所となった。トルコから台湾へ、計画が変り十分な取材もできぬまま進めたこの実習も終盤に近づいてその内容の濃さを実感する旅へと変化し、参加者全員の心を満たしていた。

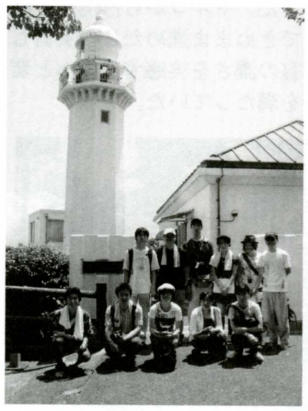


研究部会報告

江戸東京研究部会

「江戸東京研究部会」は、実際に現地を歩き、様々な視点から近世の江戸、近代以降の東京の歴史を知るため、巡検を主とした活動を展開してきました。今年度は特に一貫したテーマは設けず、毎回様々なテーマで巡検を行いました。

2008年度は、6月28日に行った第33回巡検『両国落語史跡巡り－全盛期の落語家を巡る－』が最初の活動となり、落語家の初代圓朝の住居跡等を巡りました。7月27日、第34回巡検『〈横浜開港150周年記念特別企画〉ペリー来航と江戸湾防備』と題し、浦賀～久里浜を歩き、叶神社や浦賀燈明堂などペリー来航に関する地を巡りました。8月31日、宗教研究部会との合同企画として第35回巡検『坂東33箇所巡りin鎌倉』と題し、長谷寺・杉本寺・宝戒寺（鎌倉33箇所）・安養院の4ヶ寺を巡りました。11月4日、第36回巡検『海の道と陸の道』と題し、五島美術館の特別展「古渡り更紗－江戸を染めたインドの華－」と品川区立品川歴史館特別展「東京湾と品川－よみがえる中世の港町－」を鑑賞しました。品川歴史館では、当館学芸員で江戸東京研究部会設立者でもある冨川武史氏より、展示のポイントや工夫点を解説していただき、非常に貴重な体験となりました。



2009年度も巡検活動の充実を図るとともに、他部会との連携を深めた活動を行っていきたいと思っています。

古典芸能研究部会

こんにちは、古典芸能研究部会です。古典芸能研究部会では、おもに夏の会と冬の会に活動を行っています。今年の夏の会は東京成徳大学の青柳隆先生にご協力いただき「装束の会」で十二単の着付けを教えていただきました。装束の着付けは広い場所で行ったほうがよいため、總持寺の紫雲臺で行いました。まず、青柳隆先生が参加者の一人をモデルとして装束の説明をしながら着付けを行い、その後わからないところを質問しながら互いに着付けを練習しました。

十二単は公家の女装束の通称です。下着とする裏のない単の衣に袿の袷の衣を重ねており防寒と装飾を兼ねています。美しい、雅というイメージがある十二単ですが、実際に装束を着ることで当時の公家の女性がどのように生活をしていたのかをうかがい知ることができました。まず、長い袴に袿の袷の衣、その上に唐衣装を羽織ります。すべてを着ると十二枚の着物は非常に重く、動きづらいものでした。いったん転倒をしてしまうと自力で起き上がることはできません。また、長い袴のため方向転換が容易にできず袴も半分のところまでしか足を通していないので蹴って進まなければなりません。十二単は動くことよりも座ることを前提に考えられており、公家の女性は頻繁に動き回らず、周りの女官に身の回りのことをしてもらい生活をしていたのだなと実感をしました。

十二単の装束の知識は本から得ることもできますが、実際に着るという機会はほとんどありません。触れることにより得られる知識は重要なものです。今回の活動では貴重な体験をさせていただきました。今後とも古典芸能に触れることで新たな発見がある活動をしていきたいと思っています。

宗教研究部会

私たち宗教研究部会は、立ち上げて2年目の部会です。部員11名という少人数ですが、メンバー全員とても個性が豊かでとても楽しい部会です。主に仏教や仏像をメインに学んでいますが、キリスト教やイスラム教などの他の宗教はもちろん、メンバーの興味がある事柄は積極的に取り組んでいく方針です。

昨年の活動では、春と秋に「大船観音寺」にて「キャンドルナイト」と「ゆめ観音」に参加させていただきました。そして夏には江戸東京研究部会さんとの合同企画で、「坂東三十三ヵ所巡り」をおこないました。

「大船観音寺」は大船駅の目の前にある、曹洞宗のお寺で、総持寺の末寺にあたります。「100万人のキャンドルナイト」は、でんきを消して、スローな夜を…を合言葉に、国内外で呼びかけられている環境キャンペーンです。大船観音寺では、境内に灯る広島原爆の残り火で採火式を行いました。あいにくの雨でしたが、たくさんの拝観者の方が訪れ、平和を祈るとともに、キャンドルに幻想的な明かりを灯すことができました。

「ゆめ観音」とは、アジアフェスティバルのことで、アジアの民族音楽や舞踊が披露され、万灯供養もおこなわれます。このとき万灯の灯火には原爆の火が使われました。各国の伝統芸能と夜には曹洞宗の僧侶による、萬灯供養を拝見することができました。

「坂東三十三ヵ所巡り」は江戸東京研究部会さんと合同企画だったので巡ったお寺の歴史的背景を知ることができ、とても有意義な巡検を行うことができました。

今後の活動は、まだ未定ですが大船観音のキャンドルナイトと、ゆめ観音は今年も参加する予定です。

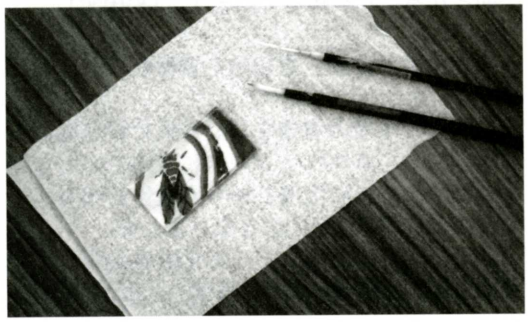
美術工芸研究部会

美術工芸研究部会では、今年度は「化粧道具」をテーマに活動を行いました。

第１回の活動は、７月に東京のサントリー美術館の特別展「KAZARI　日本美の情熱」、伊勢半本店紅ミュージアムを見学しました。サントリー美術館では、縄文時代の火焔型土器の装飾にはじまり、屏風や皿といった室内を飾るものや兜の装飾や振り袖といった身を飾るもの、さらには櫛やたばこ入れといった装飾に関する小物を鑑賞し、日本人が辿ってきた「身を飾る」という感覚は古代から現在まで続いていることを実感しました。伊勢半本店紅ミュージアムでは、江戸時代の化粧道具である紅について見学し、数人の部員は実際に紅を口に付けてもらうなど、非常に貴重な体験をすることができました。

第２回の活動は、製作体験として企画した、「蒔絵で板紅をつくる」というものです。板紅は、漆で作られた漆器で、江戸時代、女性が紅を携帯するために用いられた容器です。第１回の活動で訪れた紅ミュージアムでも作品が展示されていました。製作体験は、夏休みの期間４日間を利用して、加藤先生にお時間をとっていただき、ご指導のもと制作をしていきました。象牙の板の上に漆や金粉を用いての作業は、慎重に行わなければなりませんでしたが、金粉を磨いた後の板紅の輝きは非常に感動しました。

今年度は、部員の都合がなかなか合わず、２回のみの活動となってしまいましたが、春休みには歴史考古学研究部会さんと合同企画をするなど、今後、より充実した活動を展開していきたいと思います。



歴史考古学研究部会

歴史考古学研究部会は昨年度より活動理念である「鎌倉を拠点とし、関東全域に目を向けた活動を基本理念とし、古代から中世を中心に、歴史についてあらゆる方面からの研究を目指し、活動を行う。」を意識しています。関東だけでなく部員の興味に合わせ、地域や時代を限定することなく活動を行ってきました。

特に巡検に力を入れた活動を行っています。今年度は大阪・名古屋・愛知巡検、鎌倉巡検を行いました。鎌倉巡検では『鎌倉やぐらツアー』や出土資料整理作業の見学、鎌倉市遺跡調査・研究発表会に行きました。

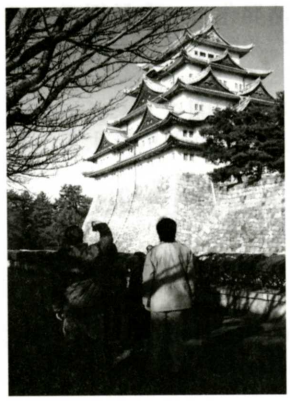
２月８日～11日　大阪・名古屋・愛知巡検とし、２泊３日で巡検旅行を行いました。大阪城や名古屋城、常滑市民俗資料館や常滑市立陶芸研究所などを巡りました。常滑市民俗資料館では常滑の三筋壷に触らせていただき、直接研究所の方にお話を聞くなど貴重な体験ができました。

２月23日　歴考研恒例巡検といえる『鎌倉やぐらツアー』を行いました。東泉水ヶ谷やぐらや百八やぐら群、朱垂木やぐら群などやぐらを巡りました。また、やぐら以外にも明王院や滑川の源流、貝吹地蔵なども見ることができました。

７月２日　北鎌倉で行われている出土資料整理作業を、発掘作業に参加させていただくことが決まった１年生達と共に見学しました。実際に鎌倉で出土した遺物に触れることができ、鎌倉で出土する遺物を実感しました。

８月24日　鎌倉生涯学習センターで行われた、第18回鎌倉市遺跡調査・研究発表会に行きました。はじめて参加した１年生には難しかったけれど、勉強になったと好評でした。

今年度は部員の都合が合わず、予定していた巡検数よりも減ってしまいました。来年度は部員の興味、研究に合わせた巡検を重視するとともに巡検数を増やし、魅力的な企画を立て、活発に活動していきたいと思います。そのはじめとしまして、３月に美術工芸研究部会との合同企画で島根に行く予定です。出雲大社をはじめ出雲、奥出雲を巡ろうと考えています。



鶴見大学文化財学会会則

1．本会は鶴見大学文化財学会と称する。
2．本会は鶴見大学文化財学科教職員・学生および卒業生、その他の関係者をもって組織する。
3．本会は文化財にかかわる人文・自然諸科学の学問交流を活発化し、会員相互の研究を推進し、かつ親睦をはかることを目的とする。
4．本会は総会を毎年一回開く。ただし必要に応じて随時会長がこれを招集することができる。
5．本会はその目的を達成するために次の事業を行う。
　1　研究等の発表
　2　講演会の開催
　3　会誌・会報等の編集刊行
　4　研究部会活動
　5　HP上での広報活動
　6　親睦その他の事業
6．本会に次の役員を置く
　1　会長（１名）は学科長に委任し、本会を代表し会務を統括する。
　2　委員（若干名）。委員は諸事業の企画運営にたずさわり、会員間それぞれで互選する。任期は一年とし留任を妨げない。
7．本会の経費は会費（年額千円）、寄付金その他の収入をもってこれに充てる。
8．本会は事務所を鶴見大学文化財学科合同研究室に置く。

付　　平成11年10月16日から発足する。
付２　平成16年４月１日　一部改正

平成21年度の年間行事予定

文化財学会総会及び春季講演会
　日　時　６月６日（土）
　　総　会　午後１時から
　　講演会　午後３時から（予定）
　会　場　鶴見大学会館メインホール
　講　演　「石見銀山
　　世界遺産への道のり」（仮）
　講演者　大國晴雄氏
文化財学会秋季シンポジウム
　日　時　11月７日（土）午後１時から(予定)
　会　場　鶴見大学会館メインホール
　テーマ　「染めと織りの文化財」（仮）

編集後記

今号の編集にあたり、学会報のあり方を改めて考えさせられました。先生方・学会委員から多くのアドバイスを頂いたおかげで、今年度の学会活動の特徴がより伝わりやすい内容にできたことを嬉しく思います。この場を借りて御礼申上げます。会報が、学会の現状を知るための一助となることを願っています。(福田記)

『文化財学会報』第10号を皆様のもとへお届けいたします。

本号より実習の報告を、４年生で行う実習Ⅳの内、国内・海外の２コースに絞ることとなりました。また、研究部会からの報告も充実しており、より興味深い内容となりました。

今後、さらに充実した『文化財学会報』が発行できることを願っております。(三島記)

鶴見文化財学会報 vol.10　訂正とお詫び

鶴見文化財学会報 vol.10 に下記の誤りがございました。訂正をしてお詫び致します。

記

・P1　「はじめまして、これからもよろしく」

誤：一拍巡検旅行
正：一泊巡検旅行

以上

また、非常用的な言い回し、漢字などは執筆者の表現を尊重するため、発刊した時の文章のままで掲載させていただきます。ご了承ください。